

# 雜報

## 校友會報

松 木 本 興

曠古の御遠忌の年も秋深くなりては、過去の出來事の如き思ひがする。四月以來幾多の先輩知友が、聖廟參拜の爲の登山に、學窓生活を偲ばれた事であらう。今年こそ春秋何れかの時、校友の多く登山した時を期して、校友大會を開き度いと思ふて居たが、イザ御遠忌の大法要となつて見ると、在山の校友さへ宣傳部に、參拜部に、法要部にと二日も三日も顔を會はさないといふ有様で、數日を経て參拜した校友の名を聞いた時には已に其の人は歸郷した後の祭りといふ様な事で、十年目廿年目で來られた人に挨拶も出來ないで遂、大法要も終了してしまつた、顧みて非常に淋さを覺ゆるが是も返らぬ操言と斷念の外はない。只々九州、北海、朝鮮、滿州あたりから來られた人々に、遠來の勞を慰ひ得られなかつた事は如何にも残念である。其の間に於いて、溝田、森亮遠、福島、安藤、間宮等の諸君と寸暇を割愛し得た事は樂しき回顧である。

身延に居れば、時々校友にも會へる、然し地方に出て見るとなか／＼其の機會はない、何處へ行つても校友の連絡、結束を望む聲は聞くが其の實はなか／＼舉らない。他の團體に對向するなんてケチな考へでなく、將來宗門發展の方策として身延を能く知つてゐる我等の校友が結束して身延を紹介する事は尤も必要な事ではあるまいか。全宗門の本末が合して身延に集まらねばならぬ機會は已に來てゐる、同じ日蓮宗の中で何處の末寺だの、何處が本山だのなんて四分五裂の小さな事をいふてゐる時代ではない。祖廟が宗門の總本山であり、日蓮宗寺院は祖廟の末寺だ。其處に宗門活動の力が生れて來る。此の運動の先陣として祖山の校友は結束したい、力ある連絡が欲しいのだ。六百五十遠忌の大法要も無事に終了した、殘された問題は、宗門教學の振興と、統一であらう。全國校友諸君の熟考を煩し度い。

(十月十六日印刷所の一隅にて)

# 同窓會々報

庶務部

幹事 深澤海晃

昭和六年三月二日、六年度同窓會幹事として不肖私達六名が當選し、超へて六月九日の同窓會大會に於て正式に就任してより未だ幾何もなく會務報告をせるは不可能の事なるも、時恰も聖滅六百五十年紀念發行として雜誌樓神の出版に際し現在に至る迄の會務報告をなす。

四、五二ヶ月間は學生は全部第一、二期の御遠忌に如實に祖師御給仕の行を積む、その間毎夜學院主催の映畫及口演を以て日蓮主義の鼓吹に力め、新舊幹事協力して之が事務に當る、その間祖山宣傳部長柴田(顛)僧正、及び、秋山、清水、松木、結城諸講師の熱烈の御後援は深く生等の感謝する所なり、

六月十六日吾學生の親近者として祖山圓伊文庫落成す、之れ、他年祖山及學院の爲に無盡なる信仰と愛護とを持てる大阪の仁岡島伊八氏の建設に因るものなり、學院の面目又一新す。

七月十一日より暑中休暇に入る、

七月廿日例年の如く大阪明淨高女の參詣あり之が歡迎茶話會を大客殿に開き共に若き者の心に日蓮聖人の聖徳を歎じ三世の反省と努力を誓ふ、吾山冷泉執事長の体驗に即せる信仰談は殊に教化の偉大なるを覺えたり、此の日朋友三木淨達君の万事心

配下されしを深謝す。

九月一日開校式を舉ぐ、

十月二日 願れば聖滅六百五十年、今正にその時なり。畏くも天恩六治に普く日蓮上人祖廟に立正の勅額御宣下の事あり、盛事に次ぐの盛事、感激に次ぐ感激、國を擧げて欽載の祝典を身延山に舉行す、吾等學生身を以て之が任の一分を背ひ、無事この真によき日の光榮に浴せり。立正の聖旨日本臣民の造時にも顛沛にも忘るべからざる一大不朽の嚴誠なり、今正に歡喜の秋にして猛省奮闘を致すの日なり。

此の日國柱會總裁田中智學先生始諸先師の口演、及舞曲は錦上更に花を添へたり。

今雜誌樓神吾等の御遠忌紀念出版として出るに及び深く天恩の無窮と能くこの光榮の日を致せる聖者の偉徳を偲び以て持つて生等將來の指針となすもの也。

今後事務多事能くこの任を遂了せんいとを祈る

因に本會役員の氏名左の如し

- |      |         |
|------|---------|
| 會長   | 岡田日躰現下  |
| 副會長  | 身延山八十二世 |
| 庶務部長 | 高田惠忍先生  |
| 會計部長 | 鹽田義遜先生  |
| 辯論部長 | 丸山顛孝先生  |
| 運動部長 | 松木本興先生  |
|      | 野崎學稔先生  |

文學部長  
購買部長

今村是龍先生  
望月德英先生

庶務部幹事

深澤海晃君

會計部幹事

田島智解君

辯論部幹事

依田湛淳君

運動部幹事

中里是要君

文學部幹事

柳井慈要君

購買部幹事

山田本秀君

全 助手

五水井榮誠君  
六、一〇、二、 以上

## 辯論部

幹事 依田 湛淳

保守的な所謂『法城を守る』と云ふやうな昔日の平和は覆されて戦鬪的な意識内に少なくなるとも吾々は覺醒してゐるはずである。覆すと云ふ言葉に不満があれば解放、改造と云はうか。何れにしろ吾々は斯くあるべきだと云ふ自己満足の思想に對して斯くあらしめねばならぬと云ふ強い意志と希望に生きてゐることは事實である。

古來幾多の人類は彼等の生存の上に、乃至は主義の立場から其の鬪争をやり續けてゐる。歴史とは其れを表裏から物語つて

ゐる事實である。然して其等人類の鬪争は彼等が單に保守的な内容にあるばかりではなく、要するところ彼等が『ねばならぬ』と云ふ自動的欲求の表現であつたのである。然らば其の勝利の月桂冠を得たものは誰であつたらう。或時代、それは武力權力の問題であつた。又或時代は化學的な戦鬪器具が如何に發達してゐるか否かと云ふことであつた。では現代に於ける武器とは何にかと云ふに決して武力權力でもなく化學的進歩有無の問題でもない。即ち時代的進歩に依て各人類は其の形色的勝利を否定し、内在的正義と熱意とが如何に他を動かす得るかと云ふ點に注目して來たのである。然しながら此の事實は決して今に初まつた事ではない、遠く聖祖日蓮上人はわづか五尺に足らざる身を以て彼の信念と誠意によく万人を動かす事が出來た。乃至は彼のルーテルの宗教改革に於けるが如き等、古來其の例を數へるにいとまがない。けれども從來の其れは殆ど或社會的形色下にあつたのであつて、現代の如き思想物質の過渡期に於ける其一の要求は、あだかも飢へた者の食を求めるが如く、赤子の乳を親ふが如き絶對要求であるのだ。吾人は今其の武器として雄辯と文學を推擧する。就中雄辯とは吾々人格の表現として、特に現代に於ける唯一なる戦鬪器具である。單に思想表現の方法としてのみではなく、あの反宗運動の如きマルクス阿片論者達に對して如何に正當なる彈壓を投げ得るかと云ふ事が所謂現代に於る辯論の果すべき使命であらう。故に吾人は雄辯は

現代は於ける鬭争武器として今后とも吾々は眞理正義に立脚し  
間斷なき練磨と油斷なき鬭争準備に邁進しなくてはならないと  
思ふ。

宗祖六百五十遠忌と云ふ意味深い歳に赤子の如き自分が此の  
責任を與へられた事は一つの恐怖であつた。然し恩師松木部長  
や諸幹事兄等に依て漸く歩み得る程度で本年の過半数をやりの  
けて來た事は感謝に絶へない。

四、五月に涉つて御遠忌の記念事業としては映講布教、道路  
布教とであつた。左に其れを畧記す。

一、四月（第一期）映講布教、道路布教、

（期日） 四月七日より十三日に至る一週間

（辯士） 松木本興先生、結城瑞光先生、武田海正、瀧川

顯照、八木慈文、白川忍、横山泰城、三木淨達、

半澤經一、箭吹勝信、梅溪英學、依田湛淳。

一、四月（第二期）映講布教、道路布教、

（期日） 四月廿一日より廿七日に至る一週間。

（辯士） 清水玄正先生、丸山顯孝先生、松木本興先生、

結城瑞光先生、武田海正、瀧川顯照、白川忍、

三木淨達、末吉元敬、中里是要、小浦孝勝、梅

溪英學、依田湛淳。

一、五月 映講布教、道路布教、

（期日） 五月一日より十五日に至る十五日間、

（辯士） 丸山顯孝先生、松木本興先生、結城瑞光先生、

白川忍、瀧川顯照、武田海正、三木淨達、矢谷

智秀、半澤經一、山田本秀、柳井慈要、小浦孝

勝、古谷智謙、依田湛淳、

以上大体の記事である、此の外本山の方からは宣傳部長柴田僧  
正を初め、綱脇龍妙師、秋山智照師の御後援を得た事は深謝に  
堪へない次第である。更に學全般の努力は一日の疲れをも打  
忘れて、只だ聖祖報恩の爲にと打込んだ純血なものであつた。

『我不愛身命但惜無上道』の聖訓が如實に吾々に行はれたわけ  
である。毎夜聽觀衆は映講の方は三百人平均、道路布教の方は  
三十人から五十人の間であつた。

一、六月十五、十六、十七日開闢大會。

松木部長、瀧川顯照、白川忍、三木淨達、依田湛淳、

一、六月廿七日午後一時より本學院講堂に於て第一期各級選

出雄辯大會開催、

開會の辭

我等と日蓮 依田幹事

余が精神の叫び 中一 佐々木順榮君

遠忌を中心として吾が宗團の發 中二 神谷宏修君

展を促す 中三 古谷智謙君

近代世相に於て吾が進むべき道 中四 梅溪英學君

永遠の生命 中五 原田忠三君

法悦なき者は佛弟子に非ず 高一 谷川寛徳君

物質文明の齎したる人類の墮落  
を論じて精神文明の展開に及ぶ 高二 白瀧川清君

所感 高三 守屋宣雄君

挨拶 松木部長

閉會の辭 深澤幹事

一、九月五日、清正公堂祭典にて左の辯士を派遣す、

福士泰重、瀧川顯照、依田湛淳、

右を以て今日までの大体の報告は終つてゐる。来る十月六日より十日間に涉ての正當御遠忌は同じく映齋布教、道路布教の豫定である。御遠忌直後十月十七日には例年の聯合雄辯大會が確定されてゐる。

## 文學部

幹事 柳井慈 要

顧るに、未開の時代を支配したものに武力だつた。劍の力だつた。然し文化の進展と向上は人類を覺醒せしめ、劍を捨て、而してペンを握らしむるに至つた。劍に依頼した愚を悟りペンの力を依頼するに至つただけに『筆ハ劍ヨリモ強シ』である。今や外交は文書戰、政治は宣傳戰、商業は廣告戰、然り而して四海歸妙は傳道戰だ。而してこれ等平和裡の武器は只一管

のペンあるのみだ。

文は人なり、と云ふ、然り文は人格であり神秘的生靈である。文は偉大なる力であり、永遠的生命を有する人格の價值的表現である。見よ。吾祖日蓮聖人の御遺墨數百余篇を繙といた時、其處に吾祖の而實不滅度の人格の躍動を見、且又表現し能はざる常住此說法的感動がある。

更に佛蘭西大革命前後の思想を通觀するに、科學思想の發達に隨ひ所謂啓蒙文學なるもの、唱導となりモンテスキュー、ヴォルテール、ルソー等の艶麗輕妙な才筆は遂に時代の思潮を一變せしめて革新の氣運を盛ならしめ、又亞米利加の奴隸解放運動なるものが、ピーチー、ストーリーと云へる一婦人の筆になる

『アンクル、トムス、ケビン』と言ふ僅かの一小説、一文學書に其因を見たるを知れば誰しも文は偉大なる力の結晶である事を知るであらう。亦我が國明治維新のあの回天の大事業を爲せる尊王思想が光陰の大日本史にあづかつて大なる事は蓋し言を要す迄もないことであらう、嗚呼偉大なるは文の力よ。蓋し文は時代に於ける不拔の力であり、文化の向上發展の活た羅針盤であり燈台である。されば文の向ふ所其處に嚴正なる社會批判の烽火は揚げられ、層一層偉大なる文明の生産を遂げて行く事が出来る。而して今、現實の世界を靜かに凝視せんか、時代は文化の限りなき急テンポの渦中に漂浪流轉し、所謂一九三一年の尖端より更に三二年の最尖端へ超スピートの轉換を行ひつゝあ

る。而し凡ゆる文學は現實主義に其價値を表し、エロ、グロ文學の新生を見、文化を生産し改造して行くべき文學は遂に苦闘や赤旗や享樂の現實に流れて行く様になた。

斯の如く殆ど文學は其の生命を没却し、展轉の窮兒が曉季の毒杯をなめ、涸濁の箇の音に絶えざる亂舞と生の争闘を續くる俗悪化された文化の中に、冷水灑面の良醫たり得るは果して誰？、そは吾々祖山學徒に残された大なる任務であり使命であらねばならぬ。即ち吾祖山の文學的使命を持ち、世の所謂自然主義的文學と其選を異にし、時代救済の最前線に立ち悩める大衆に明道を指示し、内、祖山文學の精粹と信仰信念を發揮して行く『棲神』の刊行によりて、宗教文學の眞生命を掴み、それをして時代的に最も價値あらしめ且つ表現し、吾祖山のみ持つ新鮮發洩たる靈氣の中に育くまれたる意氣を驅つて敢然救世の陣頭に立ち、血墨骨筆皮を紙とする廣令流布の佛子たる事を示さんとするにある。

不完全ながら幸ひこゝに生みの難みを脱した、宗祖六百五十五遠忌紀念號としての『第十七號棲神』は、菊花薫る今華々しく諸君の机上にまみえるのだ。これこそ熱血の筆を呵して祖山の面目を宣揚せんとする祖山學徒の文學的大飛躍の結晶なのだ。

尙本誌の刊行に際し、文學部々長今村是龍先生、殊に庶務幹事深澤海晃君の猷身的御盡力の本誌にあづかつて大いなる事は筆舌の能く之を盡す所にあらず實に感謝に堪ない。又世古政順

君が自己を忘れて不眠不休以て本誌の校正に御助力を下されし事を茲に附記して深く其の勞に感謝する次第である。

### 校正直後の感

世古政順

文學部幹事柳井慈要兄の依託により、兄と共に『棲神』印刷校正に従事させて頂く光榮を擔ひました。何か感想をと云ふので一寸述べてさせて頂きます。棲神は伸びんとする若き苗です。良き日光と雨と、良きカルチュア（地を耕すこと）と、良き肥料とを要します。日光とは法華經序品の白毫の光明（佛の智慧）であります。白毫放光序は十界同時の成佛、即ち依正二報の永遠なる生命、實現の緒であります。感激のこの年、畏くも聖上陛下は祖廟に勅額を御下賜あらせられました。これ王佛冥合の序であります。この序は妙宗發展の瑞相です。此の瑞を本として時代退嬰の折には妙法廣布の欣求の態度が必要です。私は投稿諸先生、子の熱誠を感謝し尙ほ本誌の弘法的發展こそ行學精進の聖訓に應へまつるものと信じ益々號を追て二陣三陣の愈々盛んならんことを祈ります。

### 本學寄宿舎雜報

柳井慈要

宗祖三十ヶ年折伏逆化の法鼓を收めて『かたぐ存ずる旨あれ

ば」の一言を鎌倉に残して、永遠の國家諫曉閻浮提内廣宣流布遂行の爲祖山に入られて九ヶ年間一日の如く、晝は終日一乘妙典の御論談、夜は竟夜要文誦持の御生活を遊ばしける閻浮第一の靈地、宗祖棲神の地にて而かも末法救濟平和の策源地たる御草庵に程近き最勝の地西谷の高台に、吾寄宿舎の設立を見しより既に三ヶ年の春秋を送る。其間常に法悦に浴し感激の生活を續け「同じ曉季の世に生れて師に逢はず」と草山の詩聖元政上人が熱淚以て嘆ぜし詩文を偲びては、今更本化の首に而奉するの契はざりし我等が身の罪業を省み、又宗祖棲神の法窟に猶本化教學を究むるを得し我等同胞の未だ善因縁の盡きざるかと法悦に堪へず。日夜「行學ノ二道を勵ミ候ベシ、行學タヘナバ佛法ハアルベカラズ、行學ハ信心ヨリ起ルベク候」云云の祖訓を深く遵奉し、全舎生は一意專念に其の學に其の行に不斷の精進を勵みつゝある。

舎は、本山特命の學院教授丸山頌孝先生、全教授文學士今村是龍先生を舎監に戴いてゐる。丸山舎監は本山にありて本山と舎との交渉に御盡力を下されてゐる。今村舎監は舎生と共に舎にて起居を同じうせられてゐる。先生は濃厚篤實の師にして慈愛溢るゝが如く、恰も慈母の其赤子の口に乳房をふくめるが如き温情を以て舎生の御指導に當られて居らるゝ爲に、舎内は實に百花爛滿たる春の樂園のその如く和氣讌々として幸福其ものゝ生活である。

次に役員の辭任を記せば。本舎設立以來舎長として二ヶ年間能く舎の進運の爲に力を致されし吉田孝秀君祖山負笈八星霜雪の功報ひられて三月卒業、實社會に巢立たるを以て辭表提出。舎監之が受理。舎の規定に依り本年度最上級中より後任舎長選出を舎生一同に謀らる。其の結果舎生の信頼深かりし會計總務守屋宣雄君舎長に當選。樋口寛正君副舎長となる。續いて舎長就任の守屋宣雄君會計總務を辭任せしかば世古政順君會計總務に就任す。又柳井慈要君再び會計助役に就任せり。

更に舎生の本山奉仕を畧記せば。五年十二月七日祖山法燈八十一世杉田日布上人、六百五十遠忌の事業半ばにして養生先なる沼津に於て突如御遷化、上人の御遷化は身延山は勿論日蓮宗門の一大損失である。此日舎生は舎監引卒のもとに秋霜足を氷らし寒風肌を刺す農身延驛迄御遺骸の御奉迎に、越て六月一月廿五日の御本葬式に、又三月八日八十二世岡田日歸上人御晋山式に、四月一日より五月末日に至る前後六十余日本山に起居し六百五十遠忌大法要に奉仕す、其間微力ながら本山の爲に勞を竭し又せめて宗祖への萬分一の奉公ともなり得し事ば祖山に本化の教學を學ぶ學徒として悦びに堪えぬ。

願れば、本舎創立以來二ヶ年間未だ一人の卒業生を送らざりしが、本年は多くの卒業生を當舎から送り得たる事は舎として實に喜びに堪へない。即ち、高等部卒業生吉田孝秀君、兵賀榮秀君、有光友逸君、山上省三君、中等部卒業生酒井泰雄君、島

本慈遠君、迎貞雄君、菊池温誓君等の八名、亦本平度在院生に本舎より中二の加藤智學君、田中利夫君、陶山作男君等三名を出せし事は本人の名譽は勿論論の名譽と謂つべき事である。

舎は健全なる自治制の下に各室に室長一名を置き舎生相互の學業の助成と親睦を計るを旨とし着々其實績を舉げつゝあるはよるこばしい事である。舎生日々の行事は其時節に於て多少異りはあるも現在實行せる事は、起床午前五時。朝勤五時廿分(勤經後其場に於て舎監に朝の挨拶)出席點呼。六時朝食(食法を行ふ)、六時半登校。午後三時歸舎。五時半夕食(食法を行ふ)九時迄勉強時間(八時半舎監に夜の挨拶)。十時就床。其他舎の内外の掃除、食堂の整理及び準備等は當直を定めて常に清潔を計るを旨とし其完成に努めて居る。

必竟行學の二道も心身の健全に待つべきもの多大なれば舎生の心身鍛鍊を目的として、卓球部、劍道部、弓術部。角力部、柔道部等の設置ありて舎生の親睦と質實剛健の氣風の養成に努めて居る。

大聖逝いて六百五十年其御聖徳の日に増して輝き行くと共に我等の舎も日進月歩隆盛に向ひ他日我が宗門を脊負つて立つべき本化若黨の舎より二陣三陣と引續きて輩出せん事を希望しつゝ此稿を脱す。昭和六年度在舎生は左の通りである、

高三守屋宣雄、樋口寛正、高二世古政順、江川隆治、高一山本隆也、酒井泰雄、片岡光乘、内川海儀、柳瀬眞暈、中五原田龍

啓、松井泰純、石原教温、中四柳井慈要、田本秀靜、秦是信、櫻庭是實、半田智福、平野大統、中三菅原晃、江崎龜市、古川宣悦、田島仙易、永瀧堯順、中二松尾義弘、門田薫、村上清、廣田孝存、中一齊藤勇三、信田逕運、手躰貫清、平野頌敬、中野延海、

同窓會寄附者芳名

第一期、二期 四月七日—十五日 全廿一日—廿七日 五月一日—十五日 布教費中へ。

- 一金五圓也 福島瑞岳殿
- 一金五圓也 池田壽良殿
- 一金五圓也 太田純志殿
- 一金三圓也 坂本玄善殿
- 一金三圓也 沼上光學殿
- 一金三圓也 片岡道善殿
- 一金三圓也 安藤恭善殿
- 一金二圓也 中村純厚殿
- 一金二圓也 金森案祥殿
- 一金五圓也 花鳥良瑞殿
- 一金拾圓也 柴田頌秀殿
- 一金五圓也 竹内性明殿
- 一金五圓也 藤田光潮殿

第三期(十月五日—十五日)布教費中へ。

以上